

燈臺打敷事

淺黄色、面生、裏練、

〔門室有職抄〕御所御裝束事○中

立燈臺ニハ上臈打鋪、次臺最末油器也、シタガハラケカサテ可進也、打鋪ハ非莊嚴之儀、タ、ア
ブラコボサジ料也、然者雖晴シカザランハ敢非難、其座セバクバ、四方ニチキサクヲリテ可鋪也、
箱ニ居ハ内々事也、打敷ハ貴賤ノ家ヲ不嫌可敷也、

〔枕草子六〕まさひろはいみじく人にわらはる、物哉、おやなどいかにきくらん、○中ぢもくの中
の夜さしあぶらするに、どうだいのうちしきをふみてたてるに、あたらしきゆたんなれば、つよ
うとらへられにけり、さしあゆみてかへれば、やがてどうだいはたふれぬ、したふづはうちしき
につきてゆくに、まことに道こそまんどろえたりしか、

燈臺雜載

〔寶藏一〕燈臺

かたちの眼ある事は、天に日月有がごとしとかや、世の中のあさはかなるわざより、おくぶかき
まことの道にいたるまで、見る事これがのりたり、かくてぞ先聖の亞聖にまめし給へるにも、禮
にあらずんば見る事なかれといへるを第一とし給へり、かゝる眼もうばたまの夜に入ては、あ
かりをうしなへり、此時に此灯によらでは、たれか物のあやめも見分たん、世こそりて目の薬を
たうとめども、此灯の毎夜の目の薬たる事を去らず、古人燭をとりて夜遊ぶ、良に故ある哉、茶の
會なども灯のほかげにこそ、いたりふかき事はありとこそいへれ、況や文をひろげてみぬ世の
人を友とする、こよなきなぐさみをや、猶木ずるとうろなどか、げたるもいとおかし、

燭をとりてあそべ火ともす花の陰

常々負孔氏之孫 以一餘雖竭氣根 明德未嘗成我物 灯臺本暗學窻怨